



市町村のまちづくり

～プレイスメイキング発祥地『下妻』～の 産・官・民・学連携による賑い再生事業

下妻市建設部都市整備課 課長補佐 井上 規

備し、ソフト事業により、その他のまちづくりの課題を同時解決しつつ、まちなかのにぎわい再生の大目標を達成するため事業を推進した。

■概要

砂沼周辺地区都市再生整備計画事業（H24～H28以下「砂沼周辺地区事業」）は、砂沼広域公園と市街地を含む約130haの区域で、2つの交流拠点整備による、街なかのにぎわい再生を目指した事業である。コミュニティバスとの連携やコミュニティサイクル導入による回遊性の向上、市民参加型まちづくりワークショップによるまちづくりの担い手育成などのソフト事業の展開、官学連携のプレイスメイキング※（以下「PM」）手法の導入などにより、事業効果促進を図ったのが特徴である。

下妻市は、平成30年度に立地適正化計画の公表を予定しているが、両拠点は都市機能誘導区域内に位置し、今後コンパクト・プラス・ネットワークによる街づくりや観光行政を推進する上でも重要な役割を果たす施設である。

※プレイスメイキング：一人一人が居心地の良い街の居場所づくり、その手法



観光交流センターとンモンちゃんバス

■まちづくりの課題

砂沼周辺地区事業では、解決したい大きな街づくりの課題が2つ存在した。砂沼（砂沼広域公園）を活かしたまちづくり、市街地内の大規模遊休地の活用である。

砂沼広域公園は、昭和50年代から整備が始まり、砂沼サンビーチ、1周6kmの遊歩道や砂沼大橋整備などが行われ、さらに茨城百景にも選ばれる景勝地で、市内外から来訪客が訪れた。しかしながら、そのポテンシャルをまちづくりに活かしきれておらず、砂沼の親水空間の活用は、下妻市にとってまちづくりの1つのテーマであった。

また、市街地内の大規模遊休地は、商業施設の郊外移転に伴い発生し、約20年間手付かずの状態で放置された。これら2つの大きな課題をまちづくりの拠点として整

■にぎわい広場「Waiwaiドームしもつま」



■観光交流センター「さん歩の駅サン・SUNさぬま」



■筑波大学 渡和由准教授とプレイスメイキング

渡氏が平成17年度に都市再生モデル調査で実施した下妻のまちなかでの社会実験は、市街地内でのPMを標榜する国内初の取組みと言われており、諸説あるが下妻市は国内のPMの発祥地とされている。

本市の中心市街地活性化基本計画や観光振興基本計画で策定委員長を務め、平成25年2月から始まった砂沼周辺地区事業にアドバイザーとして参画し、新たな2つの拠点を、まちなかの一人一人に好かれる空間とすべく、PMの第一人者として手腕を存分に発揮していただいた。

観光交流センターの計画段階で、渡氏が砂沼南岸のカフェ計画を、シアトル系カフェチェーン店の中で世界一美しいと言われる店舗と比較し、勝るとも劣らないと話したことをよく覚えている。当時は半信半疑であったが、建物内から窓越しに、砂沼と遠く日光連山を望む風景は、

私が昔から見てきた砂沼の風景とは別物かと錯覚する。さらに渡氏は、砂沼をカリフォルニアのウッドブリッジに例え、「Waiwaiドーム」は、5年でニューヨークに近づくと予言する。昨秋に「Waiwaiドーム」で開催された、元カウントパーシーオーケストラのJAZZピアニストのライブで、会場の雰囲気はニューヨークの様だとお褒めの言葉をいただいたのも、渡氏が手がけたPMの効果によるものであろう。



■官民連携によるカフェ

観光交流センターに、カフェ・レストランを併設するアイデアは、市民アンケートの結果によるものである。それを具体化する際に、まちづくりワークショップで意見を聞いた結果は、異口同音「市役所で運営するな」であった。そこで、観光交流センターのカフェ・レストランの要求水準を作成し、設計段階で公募を行った。選定された「株式会社坂東太郎」は、飲食店経営の実績が豊富で八代葵カフェの1号店をオープンさせたばかりであった。茨城県のアンテナショップ事業を受託し、「茨城マルシェ」を銀座で運営しており、**民間のノウハウとパブリックマインドを持ち合わせた最良の事業者**に、設計段階から関わっていただき、運営をお任せすることができた。朝7時から夜9時までサービスを提供、下妻の観光物産情報や砂沼の魅力の発信のほか、高質な空間とサービスの提供、不定休で年末年始も営業していただき、公園利用者の利便性向上や防犯効果などの役割も果たしている。

■まちづくりワークショップから市民主導の活動へ

まちづくりは人づくりとよく言われるが、砂沼地区事業では、各種の市民参加型ワークショップを行ったことによって、**ハード事業で整備したストックを活用する人が、同時に育ったことが特筆すべき事業成果**である。計画・設計段階から市民の声を随所に反映させ、供用開始後に、施設をどのように使うかを考えた社会実験も行っ

た。**市民協働で始まったワークショップは、事業完了時には、市民主導の活動へと進化**を遂げていた。

全体ワークショップは、まちづくり市民グループ「しもつま3高」に発展し、空き店舗をリノベーションした「cafe&studioかふえまる」を拠点として、様々なまちづくり活動を展開している。子育て世代ワークショップは、女性ユニット「Shi♥Shimai」として、子育て世代や女性をターゲットとしたイベントを開催、ハロウィンイベントは雨にも関わらず大盛況だった。エクストリームパークデザインワークショップは「スケートボード組織準備委員会」に発展し、スケートボードイベント・スクールの開催やパークの管理運営に協力している。



■今後のまちづくりの展開

平成29年12月に、北海道日本ハムファイターズと筑波大学発スポーツベンチャー企業が主催する「ファイターズスポーツコミュニティin下妻市」が開催された。この催しは、単なる野球教室ではなく、茨城県南県西地域と北海道を結び、スポーツを通じた地域活性化を目的とするプロジェクトの一環として行われた事業である。下妻市にとっては、**郊外の野球場でなく中心市街地の広場で行われたところにも意義があり、スポーツによる地域の活性化の可能性**を垣間見ることができた。Waiwaiドームでは、他にサッカー教室、3×3（バスケットボール）の大会などが開催されており、常設されたスケートボードパークの利用者は、北海道から関西まで広範囲に渡っている。イベントができる街なかの広場は多数存在するが、Waiwaiドームの特徴である「**スポーツもできる街なか屋根付広場**」のポテンシャルを発揮することで、**交流人口の拡大によるエリアの価値の向上につながる**と考えている。

<参考>

「Waiwaiドームしもつま」のHP内に、施設紹介や取組内容等も記載されております。